

宮相撲の西国横綱

平成の横綱といえば、平成6年初場所に弱冠22歳の若さで、見事横綱に昇進した貴乃花が注目されました。大相撲人気はまだまだ続きそうです。

相撲が「国技」として位置付けられたのは、明治期にブームがおとずれてからです。発祥は『日本書紀』によると、垂仁天皇の7月7日、野見宿禰と当麻蹶速の対戦にさかのぼります。奈良・平安時代になると、神事相撲が朝廷に取り上げられて相撲節会となり、七夕の日に国家安泰と五穀豊穰を祈って酒宴も開かれました。中世の戦国時代には、武芸相撲がさかんでしたが、江戸時代に入り戦乱が治まると、諸大名が力士たちを抱えて屋敷で相撲見物を楽しみ、それが大衆に広がり勸進相撲や辻相撲を経て興行化されました。

農耕社会では「水の神」と結びついて氏神様の収穫祭で娯楽の一つとなり「宮相撲」に変わって行きました。

筑紫野市諸田のJR筑豊線ガード近くに高さ1.75mの薄い板状の自然石の碑があり、宮相撲三人の銘が刻まれています。

(表) 西国大右衛門之碑 西国谷五郎西秀碑



▲三横綱の記念碑



▲筑紫橋の近くに建つ三横綱の記念碑（右）と木村宗右衛門翁の碑

西国浅太郎之碑
 (裏) 大正十三年十月下流
 木村宗吾 同守彦建立
 初代横綱 西国谷五郎
 筑前二日市
 二代横綱 西国大右衛門
 遠賀郡島門村
 三代横綱 西国浅太郎
 筑紫村大字諸田

この三横綱がいつごろの人か正確にはわかりませんが、明治～大正期に活躍したと推測されます。その中で、浅太郎は地元諸田の木村家出身で、村一番の力持ちとして評判だったようです。この碑は、昭和初期まで筑紫野市紫の二日市中学校横にある谷家の墓地近くにありましたが、西鉄大牟田線の工事で現在地に移されました。

筑前の宮相撲から大相撲の最高位を極めたのは、朝倉郡杷木町出身の横綱、梅ヶ谷藤太郎（明治17～18年在位）が有名です。

市内12ヵ所に大行事または高木神社が祀られています。昔から農業、牛馬、疫病の神様として信仰されていますが、野見宿禰を祭神とするところでは、相撲行事を続けています。力士は筑紫郡だけでなく朝倉、筑後、佐賀方面からも参加していたようです。

大石地区でも相撲が盛んで、1592年（文禄元）12月建立の碑があり、昭和初期に日永田甚太郎が「乱糸」の四股名を名乗っていました。下見地区には1832年（天保3）8月建立の石碑があり、地元の田川光男が「玉光」、宮本巖が「巖錦」を名乗っています。筑紫では柴田美が「筑志波」、京町出身の下田一夫は「駒勇」の名で「名開き」の披露相撲をして、戦後も市内だけでなく広く九州各地を巡回していました。こうした地方の相撲熱が国技の基盤となっているようです。

〈参考〉吉村繁資料

- ④中央が「筑志波」（昭和初期）
- ⑤まわしに「岩錦」「緑松」などの四股名が見える。近隣の村々の力士たちと思われるが詳細は不明。（昭和初期）

